

## 漢学者としての契沖

本稿は、前稿 016 への補遺の意味をもつ。

今日、契沖の『代匠記』は、『万葉集』を学ぶための書物ではなく、論文を書く際に「引く」注釈の一つとしてしか認識されていない。現在の万葉集研究の本流は、1975 年以降に隆盛を迎えた作品論ならびに、1990 年以降に隆盛をきわめた漢籍出典論の論文を引用することで成り立っており、それが論文執筆の「定石」のようになっている。そのため、型にはまったような論文が多くなっており、小さな差異をめぐっての議論に収束しがちである。しょせん、文学作品の解釈にはかなりの幅があるのであり、さまざまな読み方が許容されるのは当然である。1975 年あたりまでの研究者は激論を戦わせていたが、今はある意味で平和である。

ある研究会の席上、高名な大学教授が江戸期の注釈も読んでみると面白いと言っているのを聞いた時には驚いた。私は今なされている議論の 9 割方は江戸でなされていると思っていたからである。それほど江戸期の注釈は読まれていないし、そもそも「注釈史」がない。「注釈史」という概念すら聞かないのである。

江戸期の注釈が引用される場合、それは、澤瀉久孝氏の『万葉集注釈』が引いた場合が多い。通称「澤瀉注釈」であるが、この注釈は契沖の『代匠記』から千蔭の『略解』を經由して雅澄の『古義』に至る江戸期の万葉注釈史と近代以降の注釈史の双方を見渡しつつ書かれたものであり、はっきりと「注釈史」を展望して書かれた書物だと分かる。現代の万葉注釈のデ・ファクト・スタンダードたる小学館の新編全集本もその理論の骨格をほぼこれに負っている。

ところで、「澤瀉注釈」が『代匠記』から始まる注釈史の集大成である以上、近代以降の万葉注釈史も『代匠記』の敷いた方向の内部で展開していると言って差し支えないのである。いや、万葉注釈史そのものが『代匠記』によって開かれたのである。『代匠記』には、宣長における「古道説」のようなイデオロギー的な要素がほとんど見られず、その方法が普遍的な論理によっているため、近代でも古くなっていない。

その理由の一半は、契沖の「古書」を見るという方法が文献学としてきわめて高い水準にあったことにあるわけだが、もう一つには、契沖が『万葉集』の漢字で書かれた文字表現を漢籍と地続きのものであると受け取った、その態度にあると私は考える。ここに至って初めて『万葉集』が漢字で書かれたエクリチュールであることが明確に意識されたのだ。この点、歌の引用を漢字仮名交じりの訓読文で行う現代の万葉学は契沖に追い付いていない。

古代の歌は漢字で書くほかになかった。和語を漢字で書くのは難しい。だから、『万葉集』は極めて難解な書物になっている。契沖はこの問題に実にシステムティックなアプローチで取り組んだのであり、そのシステムが「総釈」に示されている。「総釈」を読むと『万葉集』の漢字文字列をどう表現として読めばいいのかが分かる。契沖は中世までの訓詁によるのではなく、自身の言語学を構築することで「訓」を考えている。契沖に至って初めて、漢字で書かれた原文そのものに即して、歌の意味を考える方法が与えられ、『万葉集』を原文で読むことから得られる豊かな享受体験が後人に可能になった。

実際、『万葉集』の原文を読むとどう読んでいいか分からず途方にくれる。『万葉集』を読むには全体

の組織がどうなっているかを知り、かつ、漢字文字列をどう読むかを教えてもらう必要がある。『代匠記』はそれを行っている。『代匠記』を読むと『万葉集』が読めるようになっている。

これに対して、中世の万葉学は漢字の文字面にどういう「訓」をあてるべきかということと、その「訓」をどう注釈するかというだけのものであった。漢字で書かれたその文字表現そのものについて考察するという姿勢はなかったのである。

契沖の『代匠記』に少しだけ先んじて世に出た注釈に北村季吟の『万葉拾穂抄』がある。この書は、中世歌学のみならず漢籍出典にもかなり触れており新時代の息吹を十分に反映した注釈である。しかも、これは『代匠記』と違って出版されていた。にもかかわらず、江戸注釈史に与えた影響という点で言えば、『代匠記』の比ではない。『拾穂抄』には、なぜその漢字文字列をそう訓むのかという問題意識や作品全体をどう捉えるのかという意識が窺られない。秘伝とされていたような知識を公刊した功績は大きい、注釈の姿勢としては中世の枠組みを出ていない。

こういう観点から見ると、契沖が『万葉集』の漢籍出典について初めて詳細かつ的確な指摘をしたことの意味も分かって来る。芳賀紀雄氏の『万葉集における中国文学の受容』（2003年、塙書房刊）によれば、『万葉集』の漢籍出典論の「原点」は『代匠記』にあるという（同書、p.202）。にもかかわらず、これまでに、契沖の漢籍引用の方法に関して正面から考察した研究は、国文学者のものとしては、井野口孝氏の『契沖学の形成』（1996年、和泉書院）くらいしかない。ちなみに井野口氏は小島憲之氏の門下であるがゆえに契沖がどんな書物から漢文を引用しているかという点に考察の中心が置かれている。

これに対して、東洋学者の神田喜一郎の短い文章「契沖の漢学」（『墨林閑話』、1977年、岩波書店刊）や吉川幸次郎のエッセイ集『読書の学』（1975年、筑摩書房刊）は、契沖の「漢学」の素性そのものを論じてインパクトに富む。つまり、神田も吉川も、契沖をその思想形成において捉えようとしているのである。思想は人間についての根本的な問題の考究から生まれるものであり、契沖の文学研究のその部分を捉えようとするのが神田と吉川である。

特に、中国文学者の吉川幸次郎（思想大系本『本居宣長』の編者の一人）は、契沖と宣長らを「読書の学」という観点から読むという独自の考えを打ち出していて裨益するところ大である。

吉川の理論は非常に興味深いので、いずれこのサイトで紹介したいと思っている。

ここで簡単に触れるならば、吉川の言いたいことは、第一に、契沖自身が偉大な漢学者であったということ、第二に、契沖の注釈学が、言語表現の考察を通じて人間の究明に至る「読書の学」であるということの2点に集約することができる。

吉川によれば、契沖は中国の訓詁学、朱子学、考証学の長い歴史のなかで古典がどう解釈されてきたかを展望しながら、契沖が中国の注釈史を踏まえて『万葉集』の出典論を展開していると説いている（特に同書183ページ以下参照）。そして、

たとえば、吉川はこんな言葉を書いている。

要するに「代匠記」も「余材抄」（=契沖による古今集注釈）も、「万葉」の歌なり「古今」の歌

という個別的な言語を素材としての人間の研究なのである。それはフィロロギー（＝文献学）の書であるとともに、フィロソフィ（＝哲学）の書なのである。というよりも、フィロロギーの書であることによって、フィロソフィの書なのである。（『読書の学』、p.211）

今日の国文学研究には、この「人間の研究」という観点が欠落しているのではないか。むしろ、そのようなことを言う「テキスト論」ではないからいけないと言われかねないのが今日の状況だ。今や「テキスト論」は宗教的信条と同断になっており、人間の機械化の趨勢を支えるイデオロギーになっている。日本の上代文学研究者の「テキスト論」が大昔のアメリカのニュークリティシズムと同様の論理構成である点についてはかつて『国語と国文学』93巻11号に書いたことがある（「古代テキストとの対話ということをめぐる」）。

そこでまとめたように、大昔のアメリカのニュークリティシズムおよびその鸚鵡返し理論に過ぎない日本の「テキスト論」は、「テキスト」が読者の存在抜きにアプリアリな「内容」をもって存在しているという信仰に他ならないのであり、「テキスト」を社会歴史的なコンテキストから切り離して、それ自体として読み得るし、また、読むべきだという宗教的主張になっている。1960年以後のフランスで醸成されたテキスト理論とはまったく違う単純な信仰に過ぎない。英米の文学理論もフレンチセオリーに準拠して成り立っているのが今日の状況だ。

本来、「テキスト」はどうとでも読み得る。その読みに優劣や説得力の有無をもちこみたい者は持ち込めばいいし、自分一人の読みの世界に耽溺するのもまた一興だ。だいたい人を説得するために文学作品を読むという考え自体が奇妙である。

ただし、「作者はどう考えてこの作品を書いたのか」を知りたいという欲望は誰にも起こり得る。しかし、それは読者抜きに作品の意味が成り立つことを意味しない。読者の解釈が、時に、作者の解釈を変更させることすらありうるのであって、作者と読者とは、つねに、ある種の対話関係にあるのだ。

ところが、作品を織りなす「言語」は社会的産物であり、そこにある種の普遍性が宿ってもいるのである。あるいは外部性が宿っているとも言えるだろう。作者にかりに言わんとしていることがあったとしても、作者の外部にある言語がそれを思うがままにさせないのである。作者の「意図」は、言語によって間接的にしか表現できない。

逆に、読者は、言語の側から作者の「意図」を考えようとする。「古言」から「古意」をつかむとはそういうことだ。「言語」は人間の外部にあってその人間の思考を規定するものであり、同時に、人間に言いたいことを言う能力を与えるものでもある。そのことに気づきさえすれば、「古意」をつかむことはできるのだ。構造主義的なテキスト論と動機論的な解釈は矛盾しない。

ニュークリティシズム的な「テキスト論」が機能しないのは、このような言語の性質について盲目だからである。

しかし、あらゆる創作は、不自由と自由とを同時に与える「言語」との格闘を通じて、「言わんとすること」への道程をたどる。したがって、創作行為とは、いまだないもの、あるいは、これから来るべきものを待ち、迎える行為たらざるをえないのである。それは能動的であり、かつ、受動的な行為である。

いや、そこにおいて経験される能動性も受動性も、ともに人間を痛切に目覚めさせる要素だという点が重要であろう。それは、ますます機械化する今日の人間の存在と意識の構造とはまったく別の存在と

意識の構造の話である。あるいは、受動と能動のはざまにおかれて初めて発揮されるのが人間的な創造性だともいえる。

そう考えると、「言語を素材としての人間の研究」とは、吉川の言う通り、文献学（フィロロジー）であることによって到達できる哲学（フィロソフィ）のことだということになる。

これは何も戯言でも、閑文字でもない、他ならぬ万葉人ら自身が、漢字で創作するという、まさに受動と能動のはざまの苦しくも、覚醒的な経験を横切ったのであることを思えば。

2020年3月27日 研究代表者 西澤 一光